

中学生における感動体験と自己肯定感の関連についての検討 —学校適応と家族機能の影響に着目して—

横山 里沙*¹, 久保田 瑞*², 古田 真司*³

*¹ 愛知教育大学大学院教育学研究科

*² 名古屋市立小幡北小学校

*³ 愛知教育大学養護教育講座

A Study of Relationship between Emotional Experience and Self-Esteem in Junior High School Students —Focusing on Effect of School Adaptation and Family Function—

Risa YOKOYAMA*¹, Mizuho KUBOTA*² and Masashi FURUTA*³

*¹ Graduate School of Education, Aichi University of Education

*² Obata-kita Elementary School in Nagoya City

*³ Department of School Health Sciences, Aichi University of Education

キーワード (Key Words) :

感動体験 自己肯定感 学校適応感 家族機能

Emotional Experience, Self-Esteem, School Adaptation, Family Function

I. はじめに

近年、いじめ・不登校などの心の問題が増加してきている。このような心の問題の背景には、現代の子どもたちは感情のコントロールができない、他人のことを考えた言動がとれない、よい人間関係を形成できない等の感情の希薄化が深く根付いている。速水ら¹⁾は、教師への集団面接により、子どもたちの感情の特徴とその変化およびその原因を調査し、「怒り」以外の感情の多くが、以前に比べて減少してきていることを指摘した。同様の指摘は他にも数多くされており^{2) 3)}、今の子どもたちは、感情を上手に表出できないことや、感動の減少が懸念されている。感動は、人間にとって欠かせない情動であると共に、感動体験は、生きる力をはぐくむものとして、新学習指導要領においてもその重要性が説かれている。

これまで、感動体験が自己肯定感に及ぼす影響については、西山⁴⁾や佐伯ら⁵⁾の研究により、感動体験が自己肯定感を高めることが報告されている。しかし、どのような種類の感動体験がより強く自己肯定感に影響を与えるのかは、まだ明らかにされていない。また、子どもたちの自己肯定感は、子どもの主たる生活の場である学校と家庭における行動や精神状態から、大いに影響を受けていると思われるが、そのような視点で感動体験が及ぼす影響を検討したものはあまり見られない。

そこで本研究では、子どもたちがこれまでに経験してきた感動体験の実態を明らかにし、どのような感動体験が子どもたちの自己肯定感を上げるために効果的であるのか明らかにすることを目的とする。

本研究においては、「感動」とは「感情が強く動くこと」であり、「感動体験」とは「そのような感

動を伴った体験で、時にその個人の考え方やこれまでの人生観までも変えるもの」と定義した。なお広義の「感動」、悲しみの気持ちや驚いてショックを受けるなどの負の感動（前向きでない気持ち）も含むと思われるが、本研究では、原則として「うれしい」「楽しい」「わくわくする」などといった正の感動（前向きになれる気持ち）のみを「感動」として取り上げて検討した。

なお、本研究では中学校3年生を対象に調査を行った。中学校3年生の子どもたちは、これまでに家庭や学校生活等を通して、様々な体験活動の機会を経験してきている一方、この時期の子どもたちは第2次性徴を迎え、子どもから大人への心の葛藤が起これり、様々な発達課題や危機に直面しやすいため、精神的に不安定になりやすい時期でもある。このような時期に、自己肯定感を支える要因のひとつと考えられている感動体験の実態を知ることは、学校現場にとっても重要であると考えた。

II. 方法

2010年10月中旬から11月上旬にかけて、愛知県内のA中学校とB中学校3年生の生徒398名（A中学校213名、B中学校185名）を対象に調査を実施した。2校はそれぞれ、愛知県内の尾張地区と三河地区にある地方都市の中学校であり、課外学習や体験学習の頻度も、近隣の学校とはほぼ同じである一般的な中学校である。有効回答者は333名（A中学校163名、B中学校170名）であり、有効回答率は83.7%であった。調査は、無記名自記式質問紙法によって行い、調査項目の適切さと回答可能性を高めるため、調査対象校の校長と教員の協力を得て、事前に項目のチェックをお願いした。また、質問紙には無記名で個人情報漏れることがないことと、回答するかどうかは自由意志である旨を明記し、調査の同意が得られた生徒から質問紙を回収した。なお、質問紙は、佐伯ら⁵⁾の感動体験に関する質問項目などを参考に用意した感動体験に関する40項目、Rosenberg⁶⁾による自己肯定感全般性尺度の日本語版⁷⁾、石田⁸⁾による学校適応感尺度、Olsonが作成したFACESⅢの邦訳版⁹⁾を立山¹⁰⁾が言語修正した家族機能尺度で構成されている。

(1) 感動体験に関する項目

本研究では、中学生の感動体験の実態を把握するために、佐伯ら⁵⁾が感動体験に関する先行研究で小学生に調査した22項目（中学生向きに一部改変）と、齋藤¹¹⁾の地域活動や感動体験等に関する調査研究の項目を参考に、必要と思われる18項目を併せて計40項目の質問項目を用意した（表1参照）。質問内容は、「家族で旅行に行って楽しかった」「新しいものや珍しいものを発見してわくわくした」「賞をとってうれしかった」などといった正の感動体験項目から構成されている。また、「感動」という言葉の中には「喜び」「発見」「興奮」「達成」などの要素が含まれる。個々の「感動」という言葉の認識の違いを一元化するために、「感動した」という表現は使わず、具体的な表現を用いた。

アンケートでは、各項目でそれぞれの経験が「ない」「ある」と共に、「ある」と回答した場合には回数を「1回」「2・3回」「4回以上」の3段階で、その時の感情の強さを「弱い」「やや弱い」「やや強い」「強い」の4段階で回答を求めた。本研究では、体験の強さと回数と総合的に数値化するため、次のような換算を行った。まず、感動を「感情が強く動くこと」と定義しているため、感情の強さの「弱い」と「やや弱い」場合は感動体験と見なさないこととした。「やや強い」感動体験と「強い」感動体験とその回数を考慮して、やや強い経験を1回の場合は1点、強い経験を1回では2点、やや強い経験を2～3回で2点、やや強い経験が4回以上で3点、強い経験が2～3回で4点、強い経験が4回以上で5点という形で得点化した。すなわち、強い感動を何回も経験しているほど得点が高くなるように設定した。

(2) 自己肯定感尺度

自己肯定感の測定には、Rosenberg⁶⁾の「全般」の尺度日本語版10項目⁷⁾を使用した。具体的な質問内容は、生活の満足感、自己の長所への気づき、人間関係の中の役割意識、行動面でも失敗への不安などを取り上げている。「そう思わない」「ややそう思わない」「ややそう思う」「そう思う」の4段階で回答を求め、段階順に1点～4点に点数化し、合計点を自己肯定感得点とした。

(3) 学校適応感尺度

学校適応感の測定には、石田⁸⁾の作成した学校適応感尺度16項目を使用した。質問内容は、友人関係、学習関係、教師関係、学校全体の4つの側面から設定されている。アンケートでは、「まったくあてはまらない」「ややあてはまらない」「どちらともいえない」「ややあてはまる」「とてもあてはまる」の5段階で回答を求め、段階順に1点～5点に点数化し、合計点を学校適応感得点とした。

(4) 家族機能尺度

家族機能の測定には、Olsonが作成したFACESⅢの邦訳版⁹⁾20項目を、立山¹⁰⁾が言語修正したものを使用した。質問内容は、凝集性(家族間内の情緒的絆)、適応性(状況的・発達のストレスに応じて、勢力構造や役割を変化させる家族システムの能力)、コミュニケーションから成っている。アンケートでは、「まったくない」「あまりない」「ときどきある」「よくある」「いつもある」の5段階で回答を求め、段階順に1～5点とし、合計点を家族機能得点とした。

なお、調査集計と統計解析には、統計パッケージソフト「SPSS16.0J for Windows」を用いた。有意確率は $p < 0.05$ をもって有意とした。

Ⅲ. 結果

1. 各尺度の検討

(1) 感動体験の因子分析と経験率、および性別比較

感動体験の全40項目を主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った。固有値が1以上の因子を抽出したが、その際、因子負荷量0.4未満の項目と2因子以上で0.4以上の因子負荷量となる項目を削除して再度、因子分析を行った。これを繰り返して、最終的に6因子25項目の多因子構造となる感動体験に関する尺度を得た(表1)。

第1因子は、「友達ができてうれしかった」「友達が応援してくれてうれしかった」など、友達との関わりが中心となる因子なので「F1. 友達」と命名した。第2因子は、「部活動」「試合」「体育祭」などの感動であり「F2. スポーツ」と命名した。第3因子は、「美しい景色」「流れ星」「日の出・日の入り」などが挙がっており、「F3. 自然」と命名した。第4因子は、「試験に合格」「頑張って成功」「大人に近づいた」などであり、「F4. 成功」と命名した。第5因子は「家族」「家」などが含まれる項目であり、「F5. 家族」と命名した。第6因子は、「本」「映画」「アニメ」などの感動であり、「F6. 芸術」と命名した。これらの因子を感動体験の下位尺度と見なして集計したそれぞれの値について、その信頼性をCronbachの α 係数で求めたところ、「F6. 芸術」を除いた因子ではすべて α が0.70以上(F6は $\alpha = 0.651$)であった。

F1からF6の感動体験得点とその合計得点について、男女差を検討した。「F2. スポーツ」のみ男女に有意な差は見られなかったが、その他の因子では女子の方が有意に得点が高かった(表2)。

表1 感動体験の因子分析結果

	F1	F2	F3	F4	F5	F6
F1. 友達 ($\alpha=.817$)						
新しい友達ができうれしかった	.719					
修学旅行や野外学習で、新しい知識が身についたり、友達と仲良くなれて楽しかった	.557					
人から優しくしてもらってうれしかった	.635					
頑張っている自分を友達が応援してくれてうれしかった	.551					
友達からプレゼントをもらってうれしかった	.447					
文化祭や合唱コンクールなどで、自分たちのクラスが何かを成功させてうれしかった	.423					
F2. スポーツ ($\alpha=.769$)						
部活動で仲間と一生懸命取り組んで達成感を味わった		.507				
応援しているスポーツ選手やチームが勝ってうれしかった		.440				
賞をとってうれしかった		.633				
試合に勝ってうれしかった		.684				
体育祭や大会で代表に選ばれてやる気が出た		.586				
F3. 自然 ($\alpha=.757$)						
美しい景色を見てジーンときた			.660			
流れ星や空一面の星を見て、ジーンときたり美しいと思ったりした			.625			
日の出・日の入りを見て、ジーンときたり美しいと思ったりした			.580			
自然の中で遊んで、楽しかったり、自然のすごさを知ったりした			.531			
F4. 成功 ($\alpha=.700$)						
試験(英検・漢検など)に合格してうれしかった				.420		
とても頑張ったことを成功させてうれしかった				.603		
自分が大人に近づいたと感じてうれしかった				.479		
勉強を頑張ってテストでいい点を取ってうれしかった				.588		
F5. 家族 ($\alpha=.763$)						
家族の誕生日をお祝いして、楽しかった					.533	
家の手伝いをして感謝されてうれしかった					.701	
家族などの看病をしたとき、感謝されてうれしかった					.634	
F6. 芸術 ($\alpha=.651$)						
本を読んで、元気が出たり、楽しいと思ったり、新しい知識が身についたり、涙が出たりした						.603
映画・ドラマを見て、元気が出たり、楽しいと思ったり、新しい知識が身についたり、涙が出たりした						.564
漫画・アニメを見て、元気が出たり、楽しいと思ったり、新しい知識が身についたり、涙が出たりした						.563
固有値	7.480	2.147	1.412	1.255	1.224	1.086
変動率(%)	29.918	8.588	5.647	5.020	4.895	4.344
累積変動率(%)	29.918	38.506	44.153	49.174	54.069	58.412

注1)感動体験の40項目を因子分析し、固有値が1.0以上の項目を残したところ、6因子が抽出された

注2)因子負荷量0.4以上のものを掲載

注3) α :Cronbachの α 係数

注4)因子分析の結果、削除された項目(15項目)は以下の通り

動物と仲良くできて楽しかった	卒業式で胸がいっぱいになったりジーンときたりした
家族で旅行に行き楽しかった	ボランティア活動をして感謝されてうれしかった
新しいものや珍しいものを発見してわくわくした	自分のクラスやチームが勝って、うれしかったり心が躍ったりした
音楽を聴いて、元気が出たり楽しくなったり心が落ち着いたりした	友達と仲直りができてうれしかった
予想外な出来事にわくわくした	友達がよい記録を出して、うれしかったり興奮したりした
友達が頑張っているのを見て刺激を受けた	劇やミュージカルを見て、楽しかった
あこがれている人に会ってうれしかった	今までできなかったことができてうれしかった
入学式でわくわくしたりうきうきしたりした	

(2) 自己肯定感得点・学校適応感得点・家族機能得点の平均値と性別比較

自己肯定感得点の平均値(±標準偏差)は、男子24.2(±5.2)、女子22.2(±4.9)であり、性別比較のためにt検定を行ったところ、男子の自己肯定感得点が有意に高かった。学校適応感得点の平均値(±標準偏差)は、男子52.0(±13.5)、女子52.7(±11.3)であり、男女で有意な差はみられなかった。家族機能得点の平均値(±標準偏差)は、男子55.0(±14.9)、女子58.0(±13.2)であり、女子の方がやや高かったが有意ではなかった(p=0.053)(表3)。

表2 感動体験得点の平均値と男女比較

		男(N=153)		女(N=180)		p	平均値の 男女比較
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
F1	友達	16.1	8.9	21.4	7.2	.000 *	男<女
F2	スポーツ	12.5	7.8	12.7	7.8	.827	
F3	自然	5.8	5.7	7.7	6.4	.005 *	男<女
F4	成功	6.5	6.1	8.1	5.4	.010 *	男<女
F5	家族	2.8	3.8	5.3	4.9	.000 *	男<女
F6	芸術	7.2	4.8	9.6	4.7	.000 *	男<女
感動体験得点合計		50.9	27.0	64.7	26.8	.000 *	男<女

注1)Nは度数 pは有意確率

注2)*:p<0.05

注3)F1は0~30、F2は0~25、F3は0~20、F4は0~20、F5は0~15、F6は0~15、

感動体験得点合計は0~125

表3 自己肯定感得点・学校適応感得点・家族機能得点の平均値と男女比較

	男(N=153)		女(N=180)		p	平均値の 男女比較
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
自己肯定感得点	24.2	5.2	22.2	4.9	.000 *	男>女
学校適応感得点	52.0	13.5	52.7	11.3	.591	
家族機能得点	55.0	14.9	58.0	13.2	.053 †	男<女

注1)Nは度数 pは有意確率

注2)*:<0.05 †:p<0.1

注3)自己肯定感得点は10~40、学校適応感得点は16~80、家族機能得点は20~100

2. 各尺度の相関

感動体験、自己肯定感、学校適応感、家族機能の関連性をみるために、男女別にPearsonの相関係数を求めた。男女共に、自己肯定感と学校適応感の間、学校適応感と家族機能の間では有意な正の相関がみられ、女子では、自己肯定感と家族機能の間にも強い正の相関がみられた(表4)。

感動体験の各因子と自己肯定感・学校適応感・家族機能との相関をみたところ、男女共に感動体験得点合計と学校適応感・家族機能との間に強い正の相関がみられ、女子では自己肯定感との間にも正の相関がみられた。感動体験の因子別にみると、男子では、全ての因子において学校適応感との有意な相関がみられ、家族機能とは「F6. 芸術」以外の5因子と正の相関がみられた。女子では、「F2. スポーツ」「F4. 成功」「F5. 家族」の3因子で自己肯定感と正の相関がみられ、F1~F5の5因子と学校適応感・家族機能の間で正の相関がみられた。また、男女共に、学校適応感とは「F1. 友達」が、家族機能とは「F5. 家族」が最も相関係数が高かった(表5)。

IV. 考察

1. 感動体験について

本研究では、中学生の感動体験の実態を明らかにするため、これまで行われた「感動体験」についての調査を基に、40項目による調査を行い、探索的因子分析により、中学生の感動体験に関する6つの因子(「F1. 友達」「F2. スポーツ」「F3. 自然」「F4. 成功」「F5. 家族」「F6. 芸術」)を得た。今回参考とした佐伯ら⁵⁾の先行研究では、小学生に22項目の質問をして、最終的に1因子11項目を抽出している。その中には、「できなかったことができた」「チームが勝った」「映画やアニメを見た」「友だちの頑張りを見た」などがあるが、本調査の第1因子で選ばれた「新しい友だちがで

表4 自己肯定感・学校適応感・家族機能の相関

		男 (N=153)			女 (N=180)		
		自己肯定感 得点	学校適応感 得点	家族機能 得点	自己肯定感 得点	学校適応感 得点	家族機能 得点
自己肯定感得点	相関係数	1.000	.214**	.158	1.000	.352**	.440**
	p		.008	.051		.000	.000
学校適応感得点	相関係数	.214**	1.000	.413**	.352**	1.000	.425**
	p	.008		.000	.000		.000
家族機能得点	相関係数	.158	.413**	1.000	.440**	.425**	1.000
	p	.051	.000		.000	.000	

注1)Nは度数 pは有意確率

注2)*:p<0.05 **:p<0.01

表5 感動体験の因子別にみた自己肯定感・学校適応感・家族機能との相関

		男 (N=153)			女 (N=180)			
		自己肯定感 得点	学校適応感 得点	家族機能 得点	自己肯定感 得点	学校適応感 得点	家族機能 得点	
F1	友達	相関係数	.108	.510**	.367**	.134	.469**	.328**
		p	.184	.000	.000	.073	.000	.000
F2	スポーツ	相関係数	-.015	.259**	.206*	.167*	.430**	.248**
		p	.859	.001	.010	.025	.000	.001
F3	自然	相関係数	.076	.361**	.314**	.070	.230**	.169*
		p	.349	.000	.000	.352	.002	.023
F4	成功	相関係数	.143	.418**	.323**	.220**	.353**	.393**
		p	.079	.000	.000	.003	.000	.000
F5	家族	相関係数	.158	.368**	.458**	.190*	.397**	.462**
		p	.051	.000	.000	.011	.000	.000
F6	芸術	相関係数	.105	.180*	.080	.068	.144	.114
		p	.196	.026	.323	.365	.054	.126
感動体験得点合計	相関係数	.123	.503**	.404**	.197**	.484**	.393**	
	p	.131	.000	.000	.008	.000	.000	

注1)Nは度数 pは有意確率

注2)*:p<0.05 **:p<0.01

きた」などの項目は、元々の項目に入っていない。我々は、中学生への調査項目としては不十分であると考え、齋藤¹¹⁾らが行った地域活動等に関する調査研究(2000年)を参考に、現在の中学生の実態に合った追加の項目を加えて、全部で40項目の質問項目により調査を実施した。齋藤らは、「とてもうれしかった」「とても楽しかった」など10種類を感動体験とみなして、小学5年生と中学2年生の実態を報告している。これによると、うれしかった体験の一番は、「新しい友達ができただこと」であり、ついで「試合に勝ったこと」「できなかったことができた」と続いていた。また楽しかった体験の上位は「家族で旅行」「友達と寝泊まり」「漫画・アニメ」であった。また、とても美しいと思った体験の上位は「美しい景色」「流れ星」「日の出・日の入り」であり、表現によって上位となる体験は異なる。そのため、本研究では、その知見を参考に「〇〇して、うれしかった」「〇〇して美しいと思った」という形で質問しており、さまざまな形の感動体験の頻度を相対的に捉えることができた。従って、その結果得られた6つの因子は、これまでにない、中学生の様々な感動体験を幅広く選ぶことができたと思われる。

今回の結果では、感動体験の各因子を男女別に見ると、「F4. スポーツ」以外の因子で女子が有

意に感動体験の得点が高かった。内田ら¹²⁾が報告した、中学生の学校生活についての調査研究によれば、女子は、数多くのことに「打ち込んでいる」という意識を持っており、男子に比べ積極的であり、学級をよくしたいという願いが強く、教師の指導の意図を理解し意気に感じて取り組むことが報告されている。また、戸梶¹³⁾は感動体験の効果について検討し、自分の何かを変えた感動的な体験については、同様の感動的体験をしても、その効果には性差があり、女子の方が高い傾向にあったことを示している。さらに、橋本ら¹⁴⁾の大学生を対象にした調査でも、感動体験の経験率についてほとんどの項目において男性より女性の方が高いという結果を示していた。これらの先行研究はいずれも、女子の方が男子に比べて感動体験を多く経験している、あるいは、自分の体験を感動体験と捉えていることを示す結果であり、本研究での結果は、これらの過去の知見と同様の結果であったことが確認できた。

2. 各尺度の相関と、感動体験と自己肯定感の関係について

田口¹⁵⁾は、児童期の自己肯定感と学校適応との関連を検討し、学校適応感高群の方が低群に比べて自己肯定感が高いこと、学校適応の中でも特に友人からの承認が自己肯定感を高めるために重要であることを明らかにした。また、増田ら¹⁶⁾は心身症患者と健常大学生を対象に、家族機能が心身症の発症や学校での適応、思春期の精神面や生きる喜びに与える影響について調査し、家族機能の不良が学校不適応につながることを報告している。これらは、自己肯定感、学校適応感、家族機能のそれぞれが正の相関をするという本研究の結果とほぼ一致するが、断面調査における相関関係は因果関係を意味せず、それぞれ、どの要因が他の要因に影響を与えているかを見極めることは難しい。

本研究では、感動体験の各因子と自己肯定感の間にも、いくつかの因子において相互の関係があることが示された。表5を見ると、自己肯定感と有意な正の相関がみられた感動体験の因子（女子の「F2. スポーツ」「F4. 成功」「F5. 家族」）では、それぞれ、学校適応感や家族機能とも強い正の相関が見られた。また、男子では、自己肯定感と有意な相関を示す感動体験の因子はなかったが、正の相関傾向を示した「F5. 家族 ($r=0.158, p=0.051$)」や「F4. 成功 ($r=0.143, p=0.079$)」では、いずれも自己肯定感と学校適応感および家族機能の相関が強く、同様の傾向が見られた。西山⁴⁾は、思春期における自己肯定感に関する研究の中で、自己肯定感を育てている要因として、生活体験や、グループ体験、親子関係に相関関係がみられたことを報告している。我々が今回定義した感動体験には学校や家庭で経験する体験が多く、西山の言う生活体験・グループ体験・親子関係と類似することから、この結果は、いくつかの感動体験が学校適応感や家族機能を介して自己肯定感に影響する可能性を示唆している。子どもの自己肯定感が先あって、それが学校適応感や家族機能に影響するとは考えにくく、学校適応感や家族機能が生徒の自己肯定感に影響していると考えるのが自然であろう。しかし、現実に家族機能の低下により感動体験が経験できない生徒がいることから見ても、感動体験と学校適応感や家族機能との相互の因果関係の説明は難しい。感動体験が学校適応感や家族機能を高め、さらに自己肯定感を高めるという仮説の検証は、今後の課題である。

V. まとめ

本研究では中学校3年生を対象に、感動体験と自己肯定感の関連について、学校適応感や家族機能の影響に着目して質問紙法により調査を行った。その結果、自己肯定感、学校適応感、家族機能は相互に関連があること、性別により感動体験の経験率が異なること、一部の感動体験には、自己肯定感や学校適応感、家族機能との関連が見られることが明らかになった。いくつかの感動体験は、学校適

応感や家族機能を介して自己肯定感を向上させる可能性があると考えられたが、本研究は、断面調査による検討で、相互の因果関係の詳細は明らかにできなかった。この点については、今後、さらなる検討が必要である。

VIII. 参考文献

- 1) 速水敏彦, 丹羽智美: 子どもたちの感情はどのように変化したかー教師の目から見た特徴ー, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 第49巻, 197-206, 2002
- 2) 松下姫歌, 吉田美悠紀: 現代青年の友人関係における“希薄さ”の質的側面, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 第三部, 第56号, 161-169, 2007
- 3) 太田充, 吉田恵子, 深沢ひろむ: 児童生徒のキレやすさに関わる実態調査の分析ー校種と性別に焦点をあてた調査研究ー, 山梨県総合教育センター研究紀要, 教育相談グループ, 1-43, 2005
- 4) 西山香織: 思春期における「自己肯定感」に関する研究, 立命館教育科学研究, 第5巻, 17-41, 1995
- 5) 佐伯怜香, 新名康平, 服部恭子, 三浦佳世: 児童期の感動体験が自己効力感・自己肯定意識に及ぼす影響, 九州大学心理学研究, 第7巻, 181-192, 2006
- 6) Rosenberg, M: Society and the Adolescent Self-Image, Princeton University Press, 1965
- 7) 松下覚: Self-Imageの研究, Self-esteem scaleの作成, 日本教育心理学会総会発表論文集, 11, 280-281, 1969
- 8) 石田靖彦: 学校適応感尺度の作成と信頼性, 妥当性の検討ー生徒評定と教師評定を用いた他特性ー他方法相関行列からの検討ー, 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 第12号, 287-292, 2009
- 9) 黒川潤: 円環モデルに基づく尺度(和訳版)の標準化の試み, 家族心理学研究, 第4巻, 第2号, 71-82, 1990
- 10) 立山慶一: 家族機能測定尺度(FACESⅢ)邦訳版の信頼性・妥当性に関する一研究, 創価大学紀要, 第28巻, 285-305, 2006
- 11) 斉藤哲郎, 藤原昌樹: 子どもたちの地域活動や感動体験に関する研究調査, 川村学園女子大学研究紀要, 第14巻, 第1号, 2003
- 12) 内田利広, 川戸智司行: 思春期における「心の拠り所」となる学校生活に関する研究, 京都教育大学教育実践研究紀要 第2号, 2002
- 13) 戸梶亜紀彦: 『感動』体験の効果についてー一人が変化するメカニズムー, 広島大学マネジメント研究, 第4巻, 27-37, 2004
- 14) 橋本巖, 小倉丈佳: 青年期における感動経験と共感性の関係, 愛媛大学教育学部紀要 教育科学, 第48巻, 第2号, 57-73, 2002
- 15) 田口雅徳, 浜崎隆司: 学校適応が児童の自己肯定感に与える影響, 志學館大学文学部研究紀要, 第24巻, 第2号, 77-84, 2003
- 16) 増田彰則, 山中隆夫, 武井美智子, 平川忠敏, 志村正子, 古賀靖之, 鄭忠和: 家族機能が学校適応と思春期の精神面に及ぼす影響について, 心身医学, 第44巻, 第12号, 903-909, 2004